

水辺の安全ハンドブック

川を知る。川を楽しむ



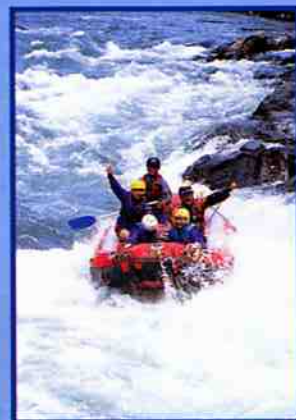
●出かける前の準備と心構え

P4 天候次第で中止もあり得る

気象情報の集め方
地図の見方の学習

P6 装備は楽しさの決め手となる

ロープワークを知っておこう
ファーストエイドキットは必携品



●出かけてからの心構え

P8-11 キャンピング

キャンプサイトの選び方
川辺でのキャンプのマナー

P12 リバー・ラフティング

フィールドの見方をマスターしよう
ライフジャケットは必需品

P14 フィッシング

水中歩行のノウハウ
水深30cm以上は渡渉せず



●玄倉川での事故等を契機に 設立された研究会からの提言

P16 「恐さを知って川と親しむために」

Text: Hisashi Terasaki
Illustration: Mikio Nakahara
Design: BB Company Limited

アウトドアでの楽しみはなんとといってもキャンプの楽しさに集約されるでしょう。日常から解放され、家族ともども自然の中でのんびりと過ごす心地よいひとときは、何事にもかえ難いものがあります。とりわけ人は水辺には引き寄せられる動物のようで、川のせせらぎを聞きながらうたた寝をしていると、遠く太古の時代へスリップする思い深いものがあります。

岸辺の深い緑、広がる小石の川原、中州には小さな流れが小石を縫うように広がり、深い淵では流れが渦巻きとなり、その下ではなにやら小魚が潜んでいる気配。このすばらしい景観は誰の手も借りずに、自然がじっくり時間をかけて育ててきたものにほかなりません。その力を借りて人は心地よい感触に浸るわけで、この至福の瞬間だけは誰にも奪われたくないものと考えます。

しかし、ひとたび水難事故に遭遇すると、こうした楽しさはすべて奪われてしまいます。では水辺の遊びで起こる事故は、避けられないものなのか。そうではありません。事前に事故に至らぬよう細心の注意意識を持っていれば事故回避は可能といえます。

川の流れや天候を観察し、自然で起こるさまざまなことに想像力を働かせて、謙虚に自然と接する態度がなにより必要になります。しかし、ひとたび何かが起こったときは自己責任での対処が厳しく求められます。そして事態の判断能力も問われ、これが生死の分かれ目になることが少なくありません。

このあたりを学習し、鍛え、いつも意識の中に置いておくことが、事故回避につながることになるわけです。

このハンドブックには楽しい水辺での遊びをより安全で楽しいものにするためのノウハウが詰め込まれています。出かける前に熟読するだけでなく、キャンプサイトに持ち込み、楽しみながら意識を高めていただければ幸いです。

笠雲は雨の予兆



山の頂上を覆う笠のような雲は写真に格好の材料だけど、これは上空に湿った気流がある証拠。湿った気流が独立して峰の地肌の温度とかかわって笠雲になるわけだから、面白い形を楽しむ前に、湿った気流は天候の崩れを意味していることをさとるべきだろう。用心に越したことはない。

日中の山風は雨になる

天気予報だけでなく自然が発する悪天のサインを見逃さないように。たとえば、日中は上昇気流により谷から山へ吹き上がる谷風が普通なのに、これが山から吹き下る風だとしたら、やがて雨になることは確実と考えたほうがいい。



遠くの音が聞こえると雨が近い



遠くの物音がよく聞こえたら雨が近い、とは昔の人の言い伝えだけれど、当たらずとも遠からずだ。というのも、高気圧に覆われているときは空気は乾燥して音も拡散してしまうけれど、空気が湿っていると音がたれ込み、そこに音がよく反射して伝わってくるのではないかと。というふうに科学的には説明できるのかもしれない。確かな根拠はないけれど、参考にして悪くなさそうだ。

ひつじ雲が出たら天気は下り坂

うろこ雲(巻積雲)が空を覆うようだと、天気は急に悪くなるといわれますが、それより雲の塊のやや大きなひつじ型のひつじ雲も、同様に急速に変化する悪天のサインです。キャンプサイトを高い位置に変更したり、撤収にとりかかったほうが無難だ。



寒くない朝は天気が下り坂

朝、テントから抜け出してくると、夏でも外気は冷え込んでいたり、あるいはテントに夜露が降りていたりするとその日は晴れになる。だが逆に妙に暖かいぞという朝は、天気は下り坂になる。寒暖の差がなく空気中に水蒸気が多いため雨模様になるわけだ。



出かける前の準備と心構え

天候次第で中止も有り得る

気象情報の集め方



象衛星画像など充実している「日本気象協会」のほか民間機関のサイトもあるから覗いてみよう。

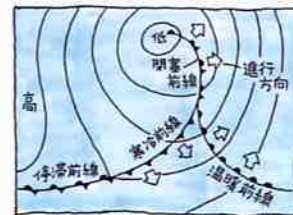
普段はテレビ、ラジオ、電話サービスなどから気象情報を得ている。これでは十分機能するけれど、さらには携帯iモードやパソコンによるインターネットでの情報も活用したい。気



キャンプを計画し日程が決まったら、まず気象情報を集め期間中の天候状況を把握しよう。天気図の読み方などを学習し、天候の変化を予測できるように

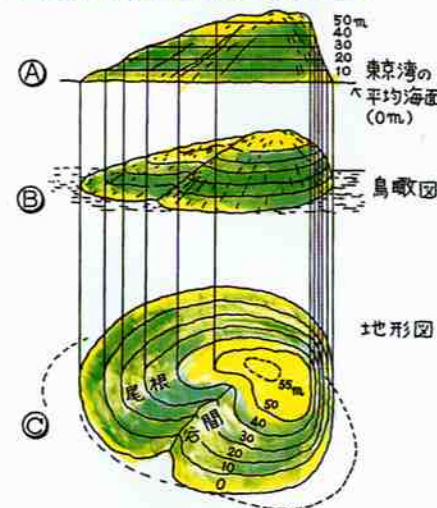
★前線の天気記号	★風力
温暖前線	風力1 風力6 風力12
寒冷前線	風向
停滞前線	矢印の方向に吹く。これは北の風力3くもり

○快晴 ○晴 ○曇 ●雨 ●雷



しておきたい。悪天候が予測できたら中止する勇気を持つ。また現場の天候が怪しくなったら撤退する勇気を持つ。これが鉄則だ。

地図の見方も学んでおこう



低気圧が発生すると天候が崩れることを知っていれば天気図(上図)でおおよその予測ができるもの。それと同様に、出かける先の2万5000分の1地図の読み方を知っていると、現地をより深く理解できるようになり、とっさの判断のときに大いに役に立つものだ。10mごとに引かれた等高線が山や谷などの鳥瞰図を想像できるようにしておくこと。コンパスを使って現在地が確認できたり、進む方向を決めたりできるようにしておくこと。記号や表記で崖、ガレ場、砂礫地、堰、溝、ダム、荒地、しの地、などの存在を読みとれるようにしておくこと。これくらいは自分のものにしよう。2万5000分の1地図は大型書店等で購入できる。

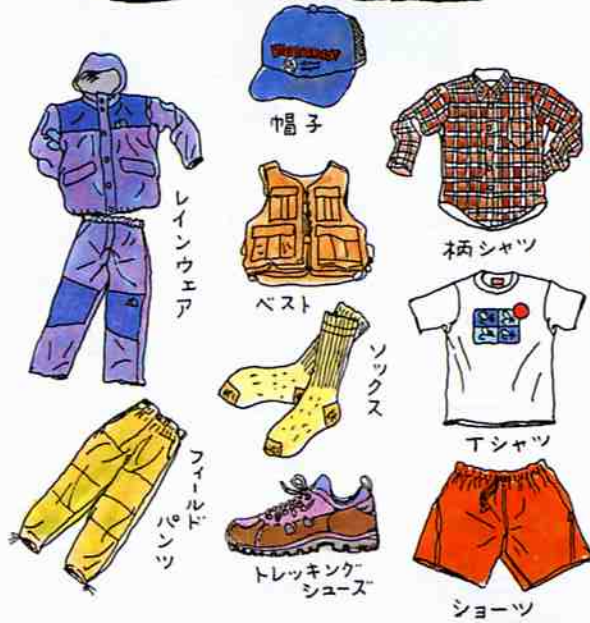


装備は楽しさの決め手となる



野外での遊びではちょっとしたケガや病気はつきものだ。だからこれにすぐに対応できる体制を整えておくのが常識だ。医薬品や医療品をリストを作って揃えておこう。市販の救急キットもあるけれど、基本的なものに加え自分なりのお好みキットを作って密封容器に入れて持参する。絶対に入らないものだからこれをさらに防水バックに入れて持参する。また、ねんざや打ち身のときの包帯の使い方も知っておこう。

ファーストエイドキットは必携品



キャンプそのものを楽しむ、キャンプしながらフィッシングをやる、リバーラフティングをやる、ネイチャーウォッチングをやる。楽しみはいくらでも広がっているけれど、装備や道具が持つ魅力というものも、アウトドアでは楽しさの大きなファクターになっている。そしてその使い方のうまい下手で、力量が問われることになる。

キャンプの服装

防水性、撥水性の良さからアウトドアウェアはナイロンやポリエステルなどの化学繊維の新素材が多く使われる。火に弱いという欠点はあるにせよ、綿より濡れにくく速乾性のあるポリエステルなどのウェアを下着から使う人も増えている。

ホームページやiモードで気象情報のチェックを

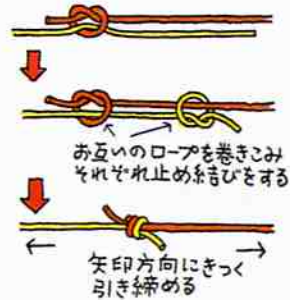
ちょっと昔なら現地において気象情報を得るには携帯ラジオが何よりの道具だったけれど、いまは携帯端末という強力な武器がある。ノートパソコンや携帯iモードで気象情報のホームページにアクセスすれば、かなり細かいところまで情報の入手が可能になった。電話による天気予報なら現地市外局番のあとに177番で聞けるし、気象庁お天気相談所なら03-3214-0218(通年9:00~17:00)でわかる。また国土交通省の川の防災情報(<http://www.river.go.jp/>)でもわかる。パソコンでの気象情報サービスは微に入り細に入りわかって驚くべき存在だ。



検索エンジンで「天気予報」と入れるとたちどころに10サイトは登場する。その一つを紹介すると、「防災気象情報サービス」(<http://tenki.jp>)などでは、天気予報、地域別天気、ひまわり映像、アメダス、天気図、といった一般気象情報のほかに注意報警報、地震・津波・台風・火山情報まで掲載している。iモードなら「Yahoo!天気」(<http://mobile.yahoo.co.jp/>)などがよく使われている。登録式の「My Yahoo!天気」などになると6時間ごとの降水確率まで出てくる。それにしては携帯電話はこれまでの無線機の使い方ができ、アクシデント発生などのときの強力な味方となるから手放せない。

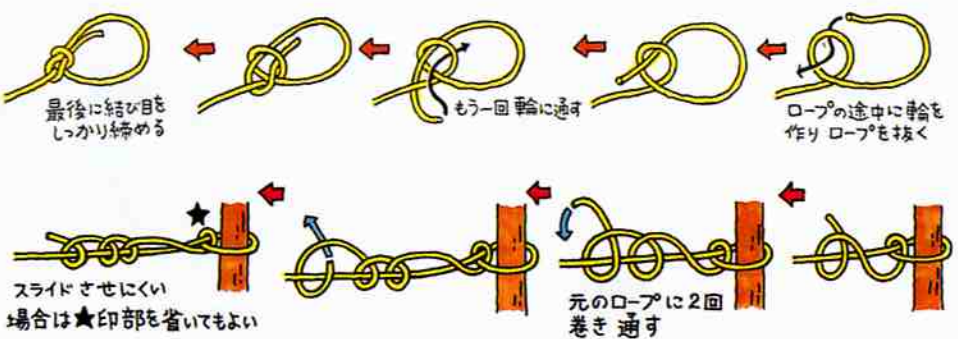


テグス結び



ロープワークを知っておこう

アウトドアにおいては、ロープワークは絶対的な必須項目。といっても、ロープワークはそれだけで一冊本が書ける程多種多様。それらをすべてマスターするなんてことは難しいけれど、2本のヒモを結ぶテグス結びと、輪を作って木などに結ぶもやい結び、自在結び、この3つだけは確実にマスターしたい。



もやい結び

自在結び

山間部では雨が降ると鉄砲水

日本の深流は急峻な谷ゆえ、ひとたび雨が降ると、川が一気に増水し鉄砲水となるケースが少なくない。雨が降ったらすぐに川から離れる、が鉄則だ。



砂防ダム真上は危険

激しい土砂の流出をくい止めるために造られるのが砂防ダム。それだけに土砂堆積は進み河床勾配が緩くなり川原は平坦でキャンプサイトに格好に見えてくる。しかしここが一番危険な場所なのだ。



ダムは適時放水がある

発電用、農業用などのためにある取水ダムは、安定的な取水量を越えようと放水しなければならない仕組みにある。放水されれば川は増水するわけで危険だ。そのあたりを十分に知っておくことだ。



大木の真下にテントは張らない

ほかに何も無い大木の真下は雷が落ちたときに飛び火するのでここも避けること。樹木の頂点から45°の角度の範囲内で真下から離れたところが影響を受けにくい場所。一番は林の中だけだ。



ダムの警報装置について

まず地図などで上流にダムがあるかを確認しよう。ダムは洪水時に限らず、人為的操作によって放流が行われることがある。このような放流があると、下流の水位は急激に増える恐れがある。放流時に安全を確保するために、下流に放流を知らせるサイレン等が設備され、事前にゲート操作の警告が発せられる決まりになっている。注意して川のそばを観察すると、必ずそういう装置が見られるはずだ。存在を確認しておこう。サイレンは休止を挟んで約1分ずつ鳴らされ、かなりの広範囲に届く大音量になっている。



川が時間とともにどんどん増水してかなり危険な状態になる直前には、必ずダムの放流警報で知らせたり、管理の作業員やら最寄りの警察官やらが、安全と待避の呼びかけをすることが普通だ。これにはいやでも素直に従うことだ。水の気配がない場所でテントを張っていても、あつという間に水没する可能性があることをお忘れなく。



退避の呼びかけには素直に従う



キャンピング

キャンプサイトの選び方

植生の痕跡のない場所は増水する

川原を見るとテントを張りたくなりますが、木々草木の植生がまったく見られない場所は水が出るといっせいに増水する場所。こういう場所にはテントを絶対に張らないこと。



日常を離れて自然の中にやってきた。さあテントを張ってすぐ行動だ。といきた

いところをグッと抑えてまず周囲を観察しよう。川の流れや岸の様子、樹木の植生からキャンプサイトを決めたいものだ。テントが浸水したり風で飛ばされてしまっただけでは最悪だから。ま、基本的には指定されたキャンプ場にテントを設置するのがなにより安全で便利ということを心得ておこう。



川原や中州は川そのものと思え

川原や中州で多少草木が生えていても、そこは増水したことがない場所とは限らない。増水する天候でなくても川原や中州には絶対にテントを張らないを鉄則にしよう。特に中州はいざというとき逃げ道がない。これをしかと肝に銘じてキャンプする場所を選ぼう。

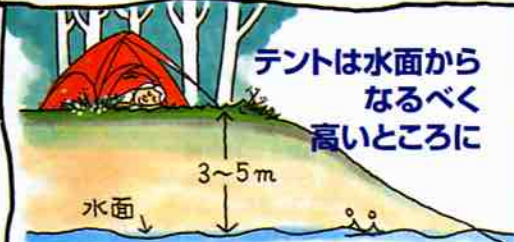


林の中の平坦な場所で

ベストのキャンプサイトは林の中の平坦な場所だ。川の増水や雷の心配もなく適度に木陰もでき快適な場所だ。それだけに競争率も高いから瞬時の判断と行動が必要になってくるけど。



テントは水面からなるべく高いところに



場所にもよるけれど川の急激な増水は平常時の水面から3~5mくらいまで増えるのがよくあるケースだといわれる。だから少なくともこれより高い所にテントを張りたいたいものだ。周囲の植生で判断できないときはこのやり方を採用しよう。

川辺でのキャンプのマナー



できるだけ洗剤を使わない

キャンプの調理道具や食器はいつも以上にきれいに洗いたいところだけど、環境への影響を考えると洗い方にも注意が必要。特に油分は流さないよう紙でふきとること。洗剤もできるだけ使いたくない。どうしてもというのなら、アウトドアショップなどで売っている環境にやさしい液体石けんを使う。



ゴミは分別して持ち帰る

ゴミは出さないに越したことはないけれど、でもどうしても出てきてしまうもの。キャンプサイトでは、最低でも燃えるゴミ、燃えないゴミを分別してキープしておきたい。しかしそれを現地のゴミ箱につこんで帰る、なんてのは言語道断だ。必ず自分の住みまで持ち帰って処理するのがキャンパーのマナーなのだ。



水 辺のキャンプとはいえ、そのほとんどが車利用のオートキャンプといえよう。電車での手荷物と違ってクルマには日常の殆どを積み込んでゆけるわけだから、野放図に持ち込んでしまいがちだ。これが周囲に迷惑をもたらすことになったりする。あくまでも自然で遊ばせてもらうことを念頭に、公共の場所でもある自然を清潔に使う努力を怠らないように。

ネイチャーウォッチングの楽しさを知ろう

ただただキャンプは寝泊まりして食事して帰るだけよ、というのではとても寂しいことだ。野鳥や森の動物の観察、バードソングの録音採集、自然で観察したものをフィールドノートへ克明に記録する、森に落ちていた鳥の羽だけをコレクションしてみる、朝日や夕日に燃える川の表情をじっくりカメラに納める、といった楽しみをいろいろ試してみたいものだ。



水遊びの注意事項

川原に草のない場所はよく水高があがる所だ。砂防ダムのある所は出水時に土砂の流れが多くなる。取水ダムのサイレンは、現在地ではなく上流の降雨量で発せられる。川原や中州は少しの水で水没し、川底の石はとても動きやすい。日本の山間部の川は少しの雨でも急激に水位が上昇することがある。雨が降ったら撤収が原則だ。また、着衣のまま水に入ると泳ぐことは難しいということも覚えておこう。

カマドの作り方と火の付け方

アウトドア・クッキングはバーナーで作ると手早いけど、やはりカマドでやると味わいが出てくる。カマドの口は風上に置くのが基本で、焚き付けは松や杉の枯葉がよく燃える。乾かした牛乳の紙パックも抜群で、これらを下に盛り薪を乗せて火をつけるだけでOKだ。



水難救助隊NPOが設立された

2000年5月に発足した「Jp-SART(広域防災水難救助捜索支援機構)」は、NPO(特定非営利活動法人)として河川での安全啓蒙活動や水難救助協力を行う全国組織だ。東京都新宿区に本部が設置され、現在は北海道(千歳川)、関東(荒川、利根川)、中部(富士川、長良川)、関西(保津川、瀬田川、北山川)、九州(球磨川)の9か所を拠点に活動を行っている。発足後まもない現在は、水難事故救助活動の

ほか、川で安全に遊ぶためのワークショップの開催、河川環境フォーラムへの参加などを通じて、団体の存在を積極的にアピールしている。また、国土交通省の関東地方整備局と提携し、職員や一般市民に対して洪水災害時の対応についての講習を共同企画するなど、行政と協力しながら安全啓蒙活動を進めている。「Jp-SART」の詳細な活動内容に関してはホームページ(<http://www.jp-sart.or.jp/>)で。

iモードで河川情報を知ろう

国土交通省は6月1日から、川の水位や上流の雨の量などの情報を、インターネットや携帯iモードで提供することになった。これは全国26か所に設置されたレーダーによって雨量を計測して、最小で5キロ四方のエリアごとに雨量が表示されるのだ。また、全国1800か所にある雨量計や、1000か所にある水位計の計測結果も提供される。この結果10分単位で更新された情報が、手元のパソコンや携帯電話で把握できるわけだ。アドレスは(<http://www.river.go.jp/>)。iモードは(<http://i.river.go.jp/>)。



大雨が降ると清流もたちまち濁流と化す。



ライフジャケットは必需品

ラフティングに格好のウエアはウエットスーツかドライスーツ。ツアーにはレンタルも用意されている。これにパドルリングシューズを履く。ライフジャケットにカヌー用ヘルメットは必須で、これなし

ではやってはいけないし、第一やらせてもらえない。あとはラダーマンの「ホールドオン(つかまれ!)」や「ゲットダウン(伏せろ!)」などの命令に従いつつ、ただひたすらパドルを漕ぎまくる。最高の川との遊びが味わえる瞬間だ。



レスキューロープのつかみ方

最近では目的の場所に届きやすい構造のスローバッグに、約15mくらいのロープを収納したものが市販されていてとても機能的だ。普通のナイロンロープを含めて、これらをレスキューロープと呼ぶ。スローバッグをつ

かんだらうつぶせに引っ張られてはいけない。仰向けで空を見る格好が抵抗を少なくする。できればバッグを股に挟み、腕力の負担を軽減してやるといい。ベルトにロープを通しバッグをくくらせて連結する、なんて余裕があるとさらにベスト。



リバー・ラフティング

川の流れと表情はいつも変わる

川幅が急に狭くなると緩やかな流れは暴れ出す。日本の峡谷は複雑な水の動きと渦が多く瀬と瀬の間隔も狭く落差も大きい。障害物もあれば蛇行流、屈曲流などの流れ方も複雑で多様だ。



流れが岸にぶつかる場所は深くて流れが速い

川の流れが表面で速く、底で遅いところで障害物にぶつかり、上部はさらに圧力を増大させる。この圧力の違いから、流れは水面から底へ引きずり込むようにより速くなっていることを覚えておこう。



大型のゴムボートに振り分けに乗って川を下るリバー・ラフティングは、スリリングなアクティビティだ。共同作業で仲間意識も芽生えてくる。自分勝手にやらずインストラクターのいるツアーに参加するのがなによりだ。基本的な知識、技術、安全への備えなどしっかり学ぼう。

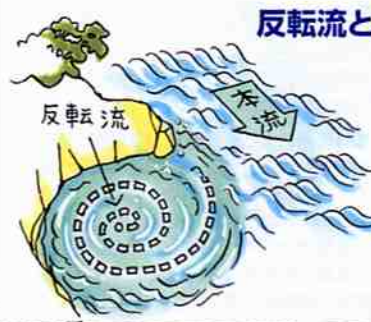


流されたときは足を川下に



仲間と離ればなれに流されても慌てず、流れに逆らわずに身を任せてしまうこと。仰向けになって足を下流に向けるのがベストな流れ方。障害物があれば足で処理できるからだ。安全な場所にたどり着くまで決して足を河床に着けないこと。見えない石や障害物に足をとられてしまうことがあるからだ。

反転流とはこんな場所



川に出っぱた岸の陰には反転流ができる。流れは逆流し渦となっている。流されたときはここに泳ぎ着くと、流されることなく救助を待てるのだ。

フィールドの見方をマスター

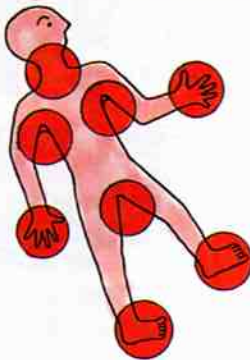
川には様々な表情がある。瀬、淵、中之島、崖、壁岩、堤防。砕け波、返し波、崩れ波、噴き砕け波。性格が我がものに。

川に学ぶ体験活動協議会

「川に学ぶ体験活動協議会」とは、人々が楽しく安全に川と親しむために、全国各地でさまざまな活動をしているNPOが中心となって設立された団体。主に正しい知識と豊かな経験を持つ「川の指導者」育成などを目的として活動している。

身体が冷えたらここを温める

落水して長時間水の中にいれば身体は冷えてくる。助けられても身体が冷えては不調になるだけだ。落水しただけで精神的なショックを受け気分が悪くなるのだからなおさら。人間は身体が冷える時は末端から冷えるから、逆に図のような末端の部位をまずはしっかり温めてやることだ。ただし本当に冷えきってしまったら、身体全体をゆっくり温めよう。



落水したらどうするか

落水してもあわててはいけない。まずは近くにいる仲間がパドルで引き寄せてくれることになる。離れてしまえば、ラダーマン(舵取り案内人)必携の救助用スローバッグが飛んでくることになるから、それにつかまればいいのだ。なによりあわてないこと。



川の構造を知って リスク回避

平瀬、早瀬、深い淵、流れのぶつかり、大滝・小滝の連続。崖、水制、崩れた岸、ゴロタ石の広い川原、中州。砂防ダム、堰、ダム。などなど、一本の川にはさまざまな表情がありさまざまな危険がその中には潜んでいる。危険を察知するのは時間のかかることから、土地の人の話にも耳を傾け学習しよう。



上流へ45度の角度で渡る

渡渉するときは対岸の目指す場所へダイレクトに向かっても、どういわけかそより下流に行き着いてしまった経験はないか。流れに負けてないつもりでもスリスリと少しずつ下流へ押しやられているのだ。目指す方向より45°くらい上流を目指して渡渉するとちょうど目的の場所に到達することになる。



荷物を腹に抱える

空手でスタッフを突いて渡渉するのがなにより一番渡りやすいのだが、釣りやその他のアクティビティではそうはいかない。ショルダーをたすきかけしたりデイバックを背負ったりが普通だ。キャンプなどでは背負えない荷物を抱えて渡ることも出てくる。これが一番難しくコケる公算も高い。胸に抱えたと前が見えなくて動きは鈍るし、上流45°を目指すのはまことに苦しい。このときは下流へやや圧されながら進む方式が渡りやすい。

フィッシング

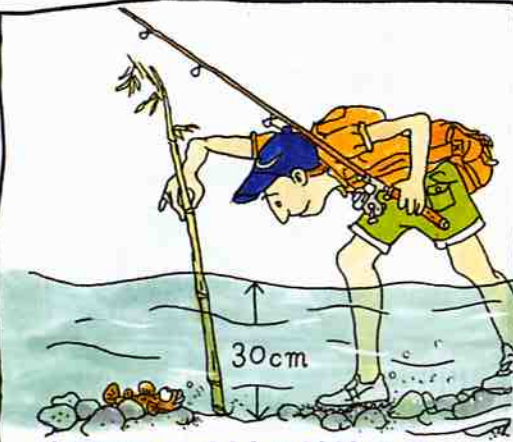
水辺のキャンピング

でももっとも手軽に楽しめるアクティビティといったらフィッシングになるのではないかな。釣り人口はほかのアクティビティに比べて圧倒的に多く、近年はルアーやフライによるスポーツフィッシングが大いに幅を利かせている。河口に近い下流域ならハゼ、コイ、フナといった魚になるし、中流域ならオイカフ、ハヤ、アユとなり、上流域でニジマス、アマゴ、ヤマメ、イワナといった魚が対象魚となってくる。ルアーやフライを使った釣りで楽しいのは上流域の深流魚であり、ここはまた周囲の環境が心なませてくれてやみつきとなるのである。しかしここは川の源流部に近くなる。それだけ危険がいっぱいでもあるので、ほかの遊びと同様の川への認識を深めていなければならないところだ。また、場所によっては規則が存在する。川には漁業権が存在するところも多く、釣法にも制限があるところがあるので、注意したい。



水中歩きのノウハウ

流れがあると膝下くらいの水深でも足を前に出すのが難しい。しかしどうしても渡らなければならない場合は、両足は肩幅に広げ底石をしっかりと踏みしめる。前進の時に足を上げずり足で一歩一歩足場を確かめて進む。このとき大石と大石の間に足を挟んでしまわないようにしよう。丈夫な太枝を杖がわりに前方に突きながら進むと前進する足はより安定してくる。



水深30cm以上は渡渉せず

むやみに水に入ってしまう釣りは、あまりいい釣りとはいえない。出来るだけ岸辺で勝負するのが基本だ。それでも、もう少しポイントに近づきたい、対岸に渡ったほうが狙いやすい、といったことが頻発するのも釣り。対岸へ渡渉するときは、水深30cmを超えたら渡らないことを決めておこう。ほぼ膝下あたりになる。浅くても川の流れは案外急で足を取られるのだ。

研究会からの提言

近年ことに高ま

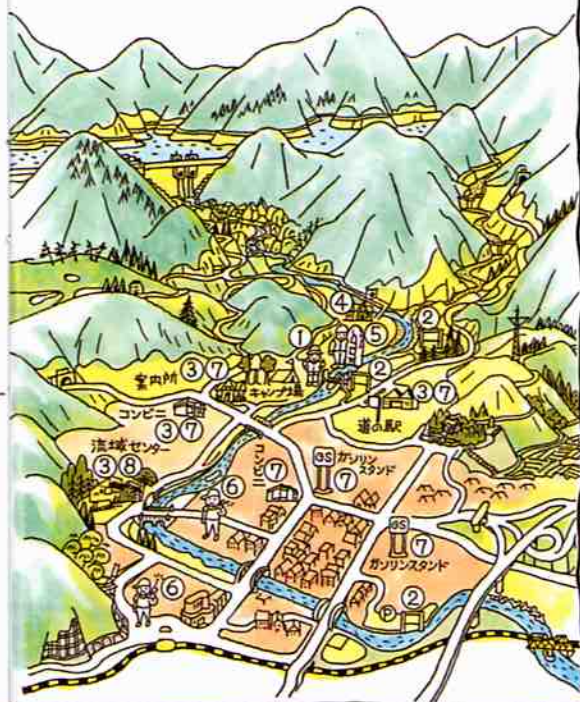
りを見せているアウトドアへの関心は、盛り上がりこそすれ影が薄くなる様子をまったくみせていない。とりわけキャンプや釣りに代表される河川利用のアクティビティは、日本人の風土や家族構成や趣味にみあっているのか、ますますの盛り上がりである。大いに楽しむべきだと思うが、その一方で楽しみのまっただ中で水難事故に遭遇する人たちが跡を絶たない。玄倉川の痛ましい事故の記憶も新しいことと思う。



このような状況の下、国土交通省が設置した「危険が内在する河川の自然性を踏まえた河川利用及び安全確保のあり方に関する研究会」が、昨年10月に提言「恐さを知って川と親しむ」を出した。

今後、どのような取り組みが必要なのか、提言を見てみよう。

**玄倉川での事故等を契機に
設立された研究会からの提言
「恐さを知って川と親しむために」**



① 河川利用時の安全確保の学習

学校教育や社会教育における河川や海岸など自然の水に関する基礎知識の習得や、安全な河川利用のための講習会の実施など実体験を通じた学習活動を実施する。また、ボーイスカウト、ガールスカウト、スポーツ少年団などが多様な野外活動の機会を利用して、河川利用における安全確保について学習できるようにする。また、現地において河川利用者に、安全面の指導をする「川のインストラクター(仮称)」を養成することも必要だ。(P13参照)



② 現地における危険情報の提供

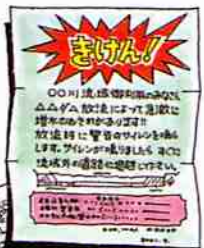


水難事故発生箇所や出水時の実績水位などの看板を設置すること。ダム放流時のサイレンの意味の周知などなど。(P9参照)



③ 河川安全利用マップ

川に入る人を対象に、その川のどこがどう危険な場所なのか、気をつけなければならないことはどんなことか、などなど細かくわかりやすい「河川安全利用マップ(仮称)」等にまとめ、情報を周知する。



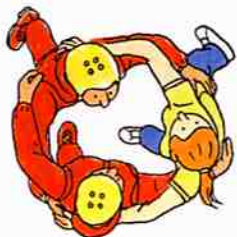
④ 救助活動拠点の整備

キャンプやその他河川利用のアクティビティが多い河川には、救助用のロープつき浮き輪など、レスキュー隊が救助活動に必要な器具を備えた拠点を整える。なお、この整備は河川を管理している国や県などの機関が協力して体制を整えている。



⑤ レスキュー隊の育成

ひとたび水難事故が起こったならば、レスキュー隊には適切な判断と迅速な行動が求められる。それは広汎な専門知識と高度な技術に裏打ちされたものでなければならず、このような能力をもつレスキュー隊の育成を図るとともに、救助活動に必要な技術の開発を行う。(P11参照)



神奈川県・丹沢・玄倉川。酒匂川水系三保ダムの丹沢湖に注ぎ込む主要な支流の一つが玄倉川だ。丹沢湖の周辺にはいくつかのオートキャンプ場が整備され、どのキャンプ場も川や湖が増水しても問題のない、水面からは高い位置の林の中に配置されている。だが1999年8月の事故はこれよりも上流の、砂防ダムの真上にある川原で起こった。そこは広く平坦で一見キャンプサイトに最適と思える川原だ。上流からの土石が砂防ダムで堆積した場所で、雨さえ降らなければ、増水さえしなければ、格好のキャンプサイトかと思われる。しかし周辺の道路わきにはキャンプするには危険であることを知らせる看板が立てられている。この看板は決してダテなどではない。砂防ダム真上の平坦で開けた川原は、一度雨が降ると危険地帯と化して



事故後、こういった新しい看板がひとつひとつ目立つようにあちこちに掲げられるようになった。

丹沢・玄倉川の水難事故に学ぶ

1999年8月、弱い熱帯低気圧が関東に大雨をもたらし玄倉川が増水し、18人が濁流に飲まれ13人が命を失った。

しまうのだ。ましてその中州となれば増水時に逃げ場はなくなる。こうした場所でのキャンプが、懸命の救助にもかかわらず13名の尊い命を奪う事故につながったのだ。

一見安全に思われるような場所であったとしても、雨が降り始めたら川原から速やかに退避する。放流警報、退避勧告には素直に従うなどなど、玄倉川事故から得られる教訓は数多い。

いまあの場所に立ってみると、どこが13人もの命を飲み込んだ川なのかと不思議に思えてしまう。川原の中ほどにわずかな水の流れが走る、だっ広い川原が望みできるだけの快晴時の玄倉川。さすがに懲りてテントはひと張りもないかと思っていたら、3張りのテントが張られていた。がんじがらめの規則だらけのキャンプなんてまっぴらだけど、最低のルールを守らないでいたら、せっかくの楽しいキャンプが一転最悪の事態を迎えないとも限らない。自然の中でこそ得られる楽しみを味わいたいのなら、自然には厳しい側面があることを忘れてはならない。天候の変化を各自が心得て、二度とこのような事故が起こらないよう肝に銘じたい。



ダムは一定量の水位をこえると、必ず放流して水位を調整する。この放流を知らせてくれるサインを周知させるための看板も増えている。



砂防ダム直上の川原は水遊びばかりじゃなく、キャンプサイトに最適に見えてしまうからこまるのだ。



広い川原、ちよろちよろの水の流れ。とても13人を死に至らしめた川とは思えないから逆に不気味になる。



林道のガードレールにそって張られた横断幕。この真下で丹沢・玄倉川水難事故現場なのである。

⑥きめ細かい情報の提供

河川を管理する国や県などは、必要に応じて民間の通信事業者の協力を得て、河川利用者が気象情報、水防警報、雨量、水位などの河川に関する情報を容易に入手できるように、携帯端末等やインターネットなどを活用した情報提供システムの構築を進める。キャンプ場の

利用者がキャンプ場の気象情報等にアクセスしやすい環境を整える。(P10参照)



⑦コンビニなど情報ゲートの整備

河川安全マップといったような印刷物をいくら作ったとしても、それが訪れる人たちの目にふれてこそ機能するものだ。そこでコンビニエンスストアやガソリンスタンドを河川情報のゲートとして、活用を図る。



⑧多様な情報拠点の整備

流域における関係機関やNPO等のネットワークの拠点となる「流域センター(仮称)」を多様な情報拠点として活用し、気象情報、河川情報など様々な情報を入手できるように整備を図る。また、救助活動を行う場合の拠点としても活用できるように配慮する。





編集・発行

財団法人 河川環境管理財団

〒104-0042 東京都中央区入船1-9-12

TEL: 03-3297-2644 FAX: 03-3297-2677

E-MAIL: info@kasen.or.jp URL: <http://kasen.or.jp/>

編集協力

(有) ライブ・ラリー

本文中の河川と天候に関わるホームページアドレス

国土交通省河川局 川の防災情報(ホームページ) <http://www.river.go.jp/>

(iモード) <http://i.river.go.jp/>

(財)河川情報センター(ホームページ) <http://www.river.or.jp/>

防災気象情報サービス <http://tenki.jp>

Yahoo!天気(iモード) <http://mobile.yahoo.co.jp/>

Jp-SART(ホームページ) <http://www.jp-sart.or.jp/>

「川に学ぶ体験活動協議会」 <http://www.rac.gr.jp/>

国土交通省河川局 提言「恐さを知って川と親しむために」 <http://www.mlit.go.jp/river/anzen/teigen/Navigation1.html>